



1636年～1869年(約230年)

伊予西條藩を知る ⑬

(第一次西條藩)一柳家、(第二次西條藩)松平家

第9代藩主 松平頼学 (在任期間 1832～1862年)



第9代西條藩主 **松平頼学**(よしさと)は、天保6(1835)年3月、第3代頼渡候以来 **106** 年目にして西條に入部すると、宗家・紀州藩編纂の地誌「紀伊続風土紀」に倣い、天保7(1836)年9月、藩校「擇善堂」の教授であった **日野暖太郎 和煦**(にこてる)に西條領内の地誌『**西條誌**』の編纂を命じた。

日野は、西條藩領内庄屋に『風土記御用二付村内調帳』を差出させた「惣改帳」「差出帳」などの基礎資料に領内(70カ村)の实地調査を加えることで、足掛け7年の歳月をかけて助編者として竹内材介敏雄、岡栄三郎秀俊、黒川定右衛門則精と実弟・日野良之助胖、絵師として樋之口分庄屋國平有同(青野國平)の協力のもと、天保13年(1842)5月西條誌1部全二十巻で、合計約1,080丁余、頁にすれば約2,170頁余という膨大な分量の地誌を完成させた。



日野和煦は編纂の基本姿勢として、西條の領土を一度も見たことのない江戸の諸役人たちに藩領の細部まで分かるようにとの方針のもと、かつ 史実や事実に忠実に記述する姿勢と相俟って、実に詳細な地誌ができあがった。日野らは筆写により5部を作成し、そのうち3部を江戸藩邸に届け、2部を西條藩に残した。西條藩に残されたものの1部が1955年に日野家より愛媛大学に寄贈された。西條誌には、**村名の由来、田畑高、家数、人数**をはじめ各村の実態が詳細に記述され、130枚にのぼる精密な写生画が挿入されている。この地域の郷土史研究の基礎的史料である。『西條誌』が記載する町村は、西條領内の **70カ町村**で

ある。西條市(旧西條市36カ村)が中心であるが、さらに東予市(旧東予市3カ村)、新居浜市(新居浜市16カ村)、土居町(旧土居町9カ村)、伊予三島市(旧三島市4カ村)、川之江市(旧川之江市2カ村)という広範囲であった。西條藩70カ町村のうち、西條町・明屋敷分・大町村・神拝村・北(喜多)川村・樋之口村・朔日市村・永易村・明神木村・福武村・千町山・藤之石山・荒川山・洲之内・西田分・中野村・中西村・安知生村・新田分・流田村・古川分・北(喜多)濱分の、合計城下町と21カ村が「伊曾乃神社」の氏子である。

『西條誌二十巻』の中で、「明屋敷分」の中の「喜多濱の弁」で紹介している、特産の「馬刀貝」は秋九月末より春三月頃までを盛りとして漁師の妻子・老弱のものまでもが採って売り、その総額は銭で約40貫目、金にして四百両という巨額に達した。喜多濱の漁師の家作が他国よりよく、生活も豊かなのは、この豊富な馬刀貝の収穫にある。事実、天保7・8年(1836、37年)の飢饉にもこの馬刀貝を採り食って飢え死にをまぬがれたのは、ただ漁師だけでなく、近辺の貧民もこれで助かったものも多かった。

だから、

『もしこの干潟を新田にせんと謀るものあらば、有司此の誌を読んで、再思を加へらるべし』

と目先の利益のため(新田開発)に干潟を埋める愚挙を批判している。当時西條藩は干拓による新田の開発を盛んに行った藩であった。